警視庁捜査一課長の俺が転職させられて失敗して世界を笑顔にする件。

仮面ライダールード

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

羽の丘警視庁の捜査一課の課長である神城ユウキ（カミシロ　ユウキ）は、ロリコン、独身男性歴＝年齢＝２５である。

そんな彼がとある女の子と出会った。

ここから、アホな男の物語が始まるのであった。

一応、時系列としてはシーズン１になります。

目次

神城ユウキとはぐみ。――1
神城ユウキと弦巻こころ――6
神城ユウキと花咲川女子学園――11
神城ユウキと奥沢美咲。――16
神城ユウキと２人のヒロイン――21

神城ユウキとはぐみ。

初めまして。
私の名前は神城（かみしろ）ユウキ（ゆうき）。
警視庁捜査一課の課長で２５歳、独身の男だ。
今の地位は親のコネではあるが、それでも私はその地位に相応しいことをしたいと…
そして…
ロリの幸せを守りたい。
この言葉に尽きる。
ちなみに今日はというと、オフの日なので適当に隣町の商店街にやってきた。
ユウキ「ふぅ…　神童さんも人使いが荒いせいで体が痛てぇ…」
神童さんとは、一応上司ではあるが、警視庁の人間ではない。
まぁ、この話はどうでもいい。
それよりお腹が空いたな。
ユウキ「時間はお昼…　ガッツリ食べたいな…　どこか…　揚げ物かお肉のお店は…」

そんなとき、ふといい匂いがした。
ユウキ「なんだ…？　コロッケか？　意外と近いな…　拳銃は…　そうだいらなかったな。」
最近、よく血の匂いを嗅いでいたので、何かの匂いを嗅いだあとは反射的に拳銃を持とうとしてしまう。
職業病というものだろう。
そして、私は出会ったんだ。
最高のコロッケと…
最高のロリに…
はぐみ「いらっしゃいませ！北沢精肉店のセール始まるよー！」
ユウキ「北沢…精肉店…　北沢…」
インプットっと。
せっかくなので見ていくか。
ユウキ「あの…」
はぐみ「はい！いらっしゃいませ！」
ユウキ「お昼ご飯をガッツリ食べたいんだけど、何かオススメあるかな？」
はぐみ「うーん…　お昼をガッツリ行くなら、はぐみのおすすめはこの北沢精肉店特

性の焼肉弁当だよ！」
ユウキ「じゃあ１つ貰えるかな。　えっと…　じゃあ１０００円で。お釣りはいいよ。」
はぐみ「いやでも…」
ユウキ「いいんだよ。　こういう時にしか私はお金を使えないからね。　ちょっとした小遣い程度と考えときなよ。」
はぐみ「え、えぇ…　あ、焼肉弁当です！」
ユウキ「ありがとね。　そういえば、君の名前は？」
はぐみ「私の名前??　北沢はぐみだよ！」
ユウキ「はぐみちゃんね。」
はい、インプット。
ユウキ「私は神城ユウキ。　今日は仕事が休みでね。隣町から来てみたんだ。」
案の定、最高のロリ様と出会えました！
ありがとうございます!!
はぐみ「隣町から！　嬉しいなー。」
そんな会話をしている時だった。
??「ひったくりよー!!」

ユウキ「!?」
はぐみ「ひったくり!?　ってあれ？ユウキさんは??」
ユウキ「待ちなさい、ひったくり犯。」
ひったくり犯「生身の野郎がナイフ恐れず来やがった…　おもれぇなぁ―！」
ユウキ「私はせっかくのオフなのに面白くなどない！」
ひったくり犯は俺に向かって突進してくる。
だが、それを交わした俺は犯人の背後に回り、死なない程度の蹴りを食らわす。
もちろん、背後に回る時にナイフは回収済。
倒れた犯人のナイフは誰の手に回ることも無く、私の手。
商店街中から歓声が巻き起こる。
だが、俺はそれを他所に…
ユウキ「悪いな城島。」
城島??「神城さん、お疲れ様っす。　今、あの商店街向かってるんすけど…　犯人抑えました？あと城島じゃなくて城之内です。」
ユウキ「当たり前だろ。上奏。」
上奏??「分かりました。早めに着くように善処します。　それと、城之内です。」
俺は電話を済ませ、犯人を抑えた状態で待った。

はぐみ「大丈夫??」
今にも彼女は泣きそうな顔である。
ロリを泣かせてはいけない。
そう思った時には遅かった。
ユウキ「大丈夫だよ。なんといっても私は羽の丘警視庁捜査一課の課長だからね。」
はぐみ「へ？警察…？」
しまった…
言ってしまった。
警視庁の人間であることを…
はぁ、この子とはお近ずきになれぬかもしれｎ…
はぐみ「すごい!!警察の人！すごい!!」
なんだか褒め称えられたようだ。
そんな彼女との初めての出会いは、ひったくり犯の逮捕で終わるのであった。

神城ユウキと弦巻こころ

ユウキ「は、初めまして…　神城ユウキです。よよ、よろしくお願いします！」
弦巻パパ「そう固くならずと。　よろしく頼むよ。娘のボディガード。」
ユウキ「かしこまりました。弦巻さん。」
今、私は日本経済の中心人物の1人である弦巻さんと酒を交わしている。
以前、商店街であのひったくり犯を撃退したのが、精肉店のロリっ娘、北沢はぐみさん、そして弦巻さんの娘さんを通して弦巻さんに知れ渡ったらしい。
その技量が認められ、弦巻さんの娘さんのボディガードを私がやることとなったのだ。
ユウキ「ですが、1つ…いや2つお聞きしたいことが。」
弦巻パパ「何かね？」
ユウキ「まず、私の家の荷物が運ばれていったのですが…」
弦巻パパ「そりゃ…　屋敷に来てもらいたいからねー。」
ユウキ「え、弦巻さんの屋敷に私が…!?」
弦巻パパ「ボディガードだからねぇ。　任せたぞー。それと、もうひとつの質問はな

にかね？」
ユウキ「確か、娘さんは花咲川女子学園に通っていらっしゃるとお聞きしています。」
弦巻パパ「そうだな。　女子高であることを気にしているのかい？」
ユウキ「はい…」
弦巻パパ「安心したまえ。学園には話を通してある。それに、娘も喜んでいたよ。『将来の旦那様!!』みたいな感じでね。」
ユウキ「いやいやいやいや。　私は今年で２６ですよ!?　娘さんとは１０歳差になるんですよ!?」
弦巻パパ「確かにそうだが…　君なら構わんよ。　私だって、嫁とは１１歳差だからね。」
ユウキ「へ、へぇ…」
だが、私はロリが好きなんだ。
ロリでなければ俺の眼中に無i…
弦巻パパ「そういえば、娘の写真だ。　可愛いだろう？」
i…
ん??
これはっ…

まさかっ…
ロリィ…
ユウキ「全力でボディガードをさせていただきます！」
弦巻パパ「そうか！何故か分からないがやる気が出たみたいで良かった！明日から頼んだぞ!!　さぁ、飲みなさい！」
ユウキ「お言葉に甘えて!!」
これ程嬉しい日は無かった。
親父のコネも意外といいもんだな。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

さて、私は弦巻さんの屋敷で目を覚ましたわけなのだが…
ユウキ「あの…　私の布団の中で一体何をしておいでなのでしょうか…」
こころ「あなたがボディガードの人ね！　今日からよろしく頼むわね！」
全然答えになってねぇ…
でも…
現物は尚更美しい…

あぁ…心がぴょんぴょんしてしまうのじゃ…
あと、今日の下着はピンクですか。
よく見えています。
至高です。
ありがとうございます、神様。
ユウキ「　神城ユウキだ。こちらこそよろしく頼む。　それと、布団からどいてはくれないだろうか??」
こころ「何故かしら??」
ユウキ「いやっ…その…」
男性諸君なら分かるはずだ。
朝のアレを…
こころ「ん??　あら?　何かしらこの硬いものは…??」
ユウキ「いやっ／／／」
こころ「!?!?」
ユウキ「そ…その…　そういうのは…大人になってからな…??」
こころ「??まぁいいわ!　朝ごはんを食べましょう!」
ユウキ「かしこまりましたお嬢様。」

こころ「こころで良いわ！」
ユウキ「えっ…　あ、こころ、行きますよ。」
こころ「はーい！」
簡潔ではあるが、私と弦巻こころの出会いの話であった。

神城ユウキと花咲川女子学園

ユウキ「なぁ、こころ。」
こころ「何かしらー？」
ユウキ「すごい周りから見られてるんだけど…」
こころ「気にすることは無いわ！　行くわよ！」
ユウキ「分かったよ。」
あぁ、わかったんだ。
この子の自由気ままさが…
まぁ…
ロリのためですからァ！
頑張るさぁ…
ああ…　ロリいぃ…
つまり、そういうことさ。
ん？どういうことだ？
まぁいっか。

こころ「あら！　はぐみじゃない！」
ん？はぐみ⁇
はぐみ「あ！こころんー！と…　あっ！この前の‼」
ユウキ「久しぶりだね、はぐみちゃん。」
はぐみ「お久しぶりです！ユウキさん！」
こころ「あら？はぐみとユウキは知り合いなのかしら⁇」
はぐみ「この人だよー、ひったくり犯を捕まえたのー！」
こころ「そうだったの⁇初めて知ったわ！」
え、本人、私のこと知らなかったの⁉
こころ「とりあえず行くわよ！ユウキ！はぐみ！」
はぐみ「ＯＫこころん！ユウキさんも！」
ユウキ「お、おう…　ってちょ、年寄りを引っ張らないでー‼」
何言ってんだ俺、まだまだ２５だろうが。
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
ユウキ「えって…こころのボディガードの神城ユウキと言います。　　　皆様、お気にならないようお願い致します。（ｏ＿　＿）ｏ」
女子「キャー‼イケメン‼」

ユウキ「えぇ…」
俺はこころと一緒に花咲川女子学園の2―Bまでやってきた。
ちなみにはぐみちゃんは別のクラスのようだ。
そして…
今に至ると。
担任「あらあらまぁまぁ、イケメンねぇ…」
あんた、教職員として止める立場やろ…
担任「とりあえずそういうわけなので、席についてホームルーム始めるわよ。（？ω？）ノホホーン」
こころ「じゃあユウキ！隣に座って!!」
ユウキ「へいへい。こころ。」
やはり、俺のある意味での転職は失敗したのではないだろうか？
警視庁捜査一課の課長から女子校で主を死守しながら授業を受ける仕事に…
うん、何かしらの失敗はしてると思う。
まぁ、なんとかなるだろうし、こころが成人すれば俺の仕事も終わるであろう。
それに、ある意味での転職であるからして、俺はまだ警察の人間だ。
そう。私はまだ警察の人間さ。

つまり、そういうことさ。
てか、花咲川女子学園って今思うと…
アイツがいるんじゃねぇのか…？
とりあえず後で聞いてみるか。
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
こころ「今日の授業も終わったわね！」
ユウキ「お疲れ様。」
こころ「さぁ、行きましょう！」
ユウキ「え？どこに⁇」
こころ「決まってるじゃない。　私の家の防音室よ！」
ユウキ「あぁ…」
こころ「そういえば、屋敷に来たのは昨日が初めてだったわね。それだったらたしかに分からないわね！」
ユウキ「だいたい分かった気がする。」
ただでさえ迷うあの屋敷の地図をロリ同人見ながらロリを覚えるかのように徹夜でインプットした俺を褒めて欲しい。
ユウキ「じゃあ行きますか。」

こころ「とりあえず、花音とはぐみと美咲を迎えに行かなきゃね！」
ユウキ「了解。ん？美咲??聞き違いかなぁー??」
（^__^ ;）…アハハハ…ハハ…ハ…
ユウキ「その美咲って人の苗字は…??」
こころ「え？奥沢よ！」
ユウキ「・・・　エンダァァァァァァアイヤァァァァァァァ!!」
まずいまずいまずい…
アイツがこの学校にいて、しかもこころと友達なんて…
やべぇよ…
マジでやべぇよぉ…
どうすればええんや…
ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

神城ユウキと奥沢美咲。

ユウキ「：（　；　？　、　：）：ガタガタガタガタ」
状況を説明しよう。
美咲と花音さんが先に屋敷に着いていたので、俺とこころとラブリーロリエンジェルことはぐみちゃんの3人で屋敷の防音室に向かっていた。
こころ「美咲も花音も先についていたとはびっくりね！」
はぐみ「だよねこころん！」
ユウキ「カタカタ？：（　。ω。、？）：」
こころ「さっきからユウキは何に震えているのかしら？」
はぐみ「会いたくて、会いたくて震えているんじゃない??」
なんかそんな歌あったな。
まぁ、会いたくなくて震えているんだけど。
こころ「それは良かったわ！」
いや良くないです。
こころ「でも笑顔は大事よ？（＊（▽（　＊）」

トゥンクっ！
ユウキ「（●´▽、●）にぱー☆」
ロリの笑顔こそ、この世の至高である。
こころ「笑ったわ！　いい笑顔よユウキ！」
はぐみ「ユウキさんの笑顔…　ちょっと怖い…」
確かに俺の笑顔は一種のホラーかもしれない。
あまり笑った生活をしてこなかったもんだしな。
それより…
美咲とは会いたかねぇ…
その理由とh…
こころ「着いたわよ！」
ユウキ「えっ、もう!?」
あっ…　終わった…
―＊´ー、＊）ノ―IO　ガチャ
こころ「お待たせー！」
花音「待ってたよこころちゃん。はぐみちゃん。」
薫「この待つ時間も…　あぁ…　儚い…」

美咲「とりあえず次の新曲の話を進め…よ…　」
美咲と目が合った。
その瞬間、美咲は言葉を詰まらせた。
そう、俺と美咲は…
美咲「ユウ兄！♡（つ、・ω・）ω―＊）ぎゅー♡」
ユウキ「み、美咲…　いくら久しぶりといってもいきなりだろ…」
美咲「勝手にいなくなったユウ兄が悪いんだから…」
こころ「２人はどういう関係なのかしら??」
黒服「お２人は余韻に浸っているようなので、私からご説明します。」
まず、お２人は同居人でした。
ユウキ様がまだ９歳の頃…　つまり１６年前。
ユウキ様のご両親はテロリストによって殺害されました。
ユウキ様達は親族から距離を置いていました。
なんせ、夫婦そろってＦＢＩの捜査官でしたから、面倒事に巻き込まれたくないと…
そのため、身寄りがいなかったユウキ様は…
薫「美咲の家族に引き取られた…ということかい？」
確かにそうです。

薫「そうか…　儚いね…　１６年前ということは、美咲はまだ生まれてないようだけど。」
はい。
奥沢様が産まれる1か月前と記録されています。
ユウキ「ま、そうだな。　でも、美咲の両親が実は親父達の幼馴染みとは思わなかったな…」
美咲「でも、ユウ兄が私のお兄ちゃんになってくれて良かった…」
こころ「それで、美咲の涙の理由はなんなのかしら？」
美咲「数ヶ月前、ユウ兄が仕事の関係で、どこかに行っちゃって…　もう会えないと思ってたら…」
ユウキ「心配かけちまったな美咲。　でも、言ったじゃん。今の捜査終わったら戻るって。」
美咲「うん…」
ユウキ「まぁ、その捜査から外れてこころの護衛をやることになったんだけどね。」
美咲「じゃあ、たまに家来てくれる??」
ユウキ「もちろんだろ。　俺、お前のこと（妹系ロリ的意味で）好きだからな。」
美咲「／／／　」

ユウキ「で、新曲の話するんだろ？　後ろで聞いてるからｓ…」
こころ「何言ってるの？ユウキもハロハピの一員よ！」
ユウキ「ファッ!?」
はぐみ「そうだよユウキさん！　一緒にバンドしよ！」
薫「（ー―ω―）ウム。」
花音「よ、よろしく…ね??」
美咲「ユウ兄～～」
ユウキ「分かったよ…　よろしくな、ハロハピ。」
今ここに、新生ハロハピが誕生したのであった。

神城ユウキと2人のヒロイン

ユウキ「？（　??凵??　）？ファ～」
昨日のハロハピの集まりが終わり、俺はこころと同じ部屋にいる。
まだ眠い…
こころ「＿（[??]　⊠ω⊠　）＿スヤァ…」
ユウキ「今何時だっけか…　もう3時か…　こころの学校まであと5時間弱…　仕方ない…　ランニングでもするか…」
《2時間後のとある公園》
ユウキ「結構走ったな。　ん？あれは？」
俺が見た方に、はぐみがいた。
うわぁぁぁ～
走ってかいた汗が滴り落ち…
下着が若干透けてしまい、あの小さくも愛くるしいおっぱ…ちっぱいが…
あぁー。
心がロリロリするんじゃぁー。

はぐみ「ん？ユー君？」
ユウキ「おっすはぐみ。朝からランニングか？俺もだ。」
はぐみ「ほんとー！　一緒に走ろー！」
ユウキ「おぉー、行こうかー。」
本当は2時間ぶっ倒しで走ってたからめちゃんこ疲れてる…
でも、ロリれるからええんやで。
はぐみ「そういえば、今日は学校終わったらどうするのー？」
ユウキ「特にまだ決めてないけど。」
はぐみ「じゃあ買い物しにいこーよ！」
ユウキ「俗に言うデートってやつですな。え？」
はぐみ「え？デデデデートォッ!?」
ロリデートｋｔｋｒ。
ユウキ「とりあえず、買い物どこ行く？」
はぐみ「スポーツショップでしょー、本屋でしょー、ショッピングモールでしょー。
あと…　タピオカ！」
ユウキ「いいねー。　楽しみだねー。　あと、もうこの公園を８９週ぐらいしてるけどそろそろ帰らない？」

はぐみ「そうだねー！じゃあまた学校でねー！」
ユウキ「またな。」
さて、家に帰ってシャワー浴びて朝ごはん食べるか。
《弦巻邸》
こころ「ふわぁー　おはよう～ユウキー」
ユウキ「おはよう、こころ。」
こころ「今日は特に何もないけど放課後はなにかするの？」
ユウキ「はぐみたんとデート。」
こころ「んー？　デート？　え？」
ユウキ「うんデート。」
こころ「(・÷・)・・・　浮気者。」
ユウキ「え？ちょ、今なんて!?」
浮気者!?
俺が!?
つまり、こころたんは俺のことを…
まじえんじぇー
黒服「朝ごはんの準備が整いました。　お席へどうぞ。」

こころ「行くわよ！ユウキ！」
ユウキ「おう！」
その笑顔がどこか怖いですこころたん。
《学園での昼休み》
こころ「あら？あれは香澄かしら？　香澄ーー！」
と、こころたんは窓から顔を出す。
ん？不味くね？
香澄「ん？あ！こころん！」
こころ「今行くわね！」
ユウキ「え？」
まさか窓から…
ここ3階だぞ!?
こころ「えいっ！」
ユウキ「こころーー!!」
あ、黒だ。
ロリ黒パン最高。
じゃなくてこころは…？

あら？無傷??
俺いらなくね？
ユウキ「こころ無事かー？」
こころ「問題ないわ！」
ユウキ「そうかいそうかい。なら安心だ。俺も今行くよ。ちょっとまっててて。」
さて、こころたんの元へと行きますかー。
??「ちょっと待って…くれるかな？」
ユウキ「ん？その声は…」
そこにいたのは驚くべき人物だった。
次回に続く。